

氏 名	兪 鳴 奇
学 位 の 種 類	博士（歴史民俗資料学）
学 位 記 番 号	博甲第 264 号
学位授与の日付	2020 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文の題目	漁撈に関する民俗知の研究 —中国沿海地域における海南島と青島を事例として—
論 文 審 査 委 員	主査 神奈川大学 教授 小 熊 誠 副査 神奈川大学 教授 佐 野 賢 治 副査 神奈川大学 特任教授 昆 政 明 副査 東 北 大 学 名誉教授 川 島 秀 一

【論文内容の要旨】

本論文は、中国海洋漁民を研究対象とし、彼らの漁撈をめぐる「民俗知」を史料から分析した。具体的には、中国沿海地域の海南島と山東省青島の 4 つの漁村を事例とし、彼らの漁撈活動を総体的に明らかにした。

本論文は、序章と終章を含む 7 章から構成されている。各章は、以下の通りである。

序章

- 第 1 節 問題の所在
- 第 2 節 先行研究
- 第 3 節 調査地の選定
- 第 4 節 論文構成

第1章 漁撈と航海術に関する史料

はじめに

- 第 1 節 漁撈に関する史料
- 第 2 節 航海術に関する史料

おわりに

第2章 沿岸漁業にみる民俗知 I —海南島鶯歌海の定置網漁を事例に

はじめに

- 第 1 節 海南島鶯歌海地域の概要
- 第 2 節 鶯歌海地域の漁船
- 第 3 節 鶯歌海地域における定置網漁の航海術
- 第 4 節 鶯歌海地域における定置網漁の漁具と漁法
- 第 5 節 鶯歌海地域の漁撈に関する信仰と禁忌

おわりに

第3章 沿岸漁業にみる民俗知 II

はじめに

- 第 1 節 青島市と会場地域の概要

- 第2節 青島市の漁船の歴史と会場の造船技術
- 第3節 会場地域における定置網漁の漁具と漁法
- 第4節 会場地域における定置網漁の航海術
- おわりに

第4章 沖合漁業にみる民俗知—青島港東のサワラ流し網漁を事例に はじめに

- 第1節 青島港東地域の概要
- 第2節 港東地域におけるサワラ流し網漁の漁具と漁法
- 第3節 サワラ流し網漁の重要な道具—「掂水砣」について
- おわりに

第5章 遠洋漁業にみる民俗知—海南島潭門の採貝漁を事例に はじめに

- 第1節 海南島の自然環境と漁撈活動
- 第2節 海南島潭門地域の漁船
- 第3節 海南島の航海書—「更路簿」について
- 第4節 羅針盤と方位の判断
- 第5節 危険を避けるための気象予測
- おわりに

終章

- 第1節 漁撈にめぐる民俗知の内容
- 第2節 中国沿海地域における漁撈にめぐる民俗知の特徴
- 第3節 民俗知についての再定義

序章は、問題の所在、先行研究、調査地の選定、論文構成と4つの節によってまとめられている。従来の研究は、中国の海洋文化を、海洋政策、海洋シルクロードなど公的な面から探究した研究が多くあった。他方、漁村生活、漁民の習俗・技術・知識など、常民の面からの研究は少なかった。本論文は、常民としての中国海洋漁民に着目し、彼らがもっている「民俗知」を歴史学、民俗学、資料学という3つの研究方法を用いて明らかにした。また、これまでの「民俗知」の定義と研究を整理し、「民俗知」について、体系的な研究と明確な定義が必要であることを提示した。

第1章では、漁撈と航海術に関する史料をまとめた。はじめに、歴史学的アプローチから、漁撈と航海に関する歴史資料を整理した。そして、「民俗知」に関する資料の概況と性格を明らかにした。中国沿海地域では、長い漁撈活動の中で、多様な漁撈技術が発展した。しかし、そのことに関する資料は、全体的に少ない。また、漁民に関する記録や情報は、断片的なものである。そのため、漁撈に関する「民俗知」を全体的に把握するには、こうした資料とともに、民俗学的アプローチが必要となる。

第2章では、沿岸漁業の海南島鶯歌海の定置網漁を事例に、「民俗知」の全体像を捉えた。定置網漁に関わる造船、漁具、航海術、出漁、信仰・禁忌などの面から漁民の知識・技術・技能を探った。漁船や漁具は、魚種、漁場の環境などに応じて作られる。一方、航海では、現代的な技術と伝統的な技術・知識を併用している姿が多くみられる。漁をする際には、杭の設置など漁民たちの間の協力が不可欠である。また、実際の漁獲には「流水」などの海況の把握が必要である。「流水」（潮流）の知識は、漁の全般にわたり重要な知識である。また漁民の日常生活（民歌・ことわざなど）にも、大きな影響を及ぼしている。

第3章では、青島会場地区の定置網漁を事例に、海南省の鶯歌海における定置網漁との比較を行った。具体的には、造船の歴史と漁具・漁法の2つの面から展開した。造船は、1952年以降帆船から機帆船に変化し、近海の流し網漁、底引き網漁、定置網漁に使われた。造船は船大工によって作られるが、流し網漁船の船底の幅は狭く、底引き漁船の船底の幅は広く調整される。また、船の骨組みである「骨架」が重要であり、それが船の速さと安定性に大きな影響を与える。網の漁具と漁法は、網によって異なり、これが漁民の知識となる。最後に、同じ魚種をとる漁撈においても、自然環境の相違から、異なる「民俗知」が生じる点を提示した。

第4章は、沖合漁業の青島港東地域のサワラ流し網漁を事例に、「掂水砣」という道具を中心に検討した。サワラ流し網漁は、固定されている定置網漁と違い、移動しながら流動的に魚をとる漁である。この漁法にとって重要なことは、固定した漁場を正確に探すことではなく、流動する漁場の環境を判断することである。また、青島地域では、霧がよく発生するため、霧による事故が起きないように航海の安全が重視されている。いずれの場合にも、船の位置を知るために海に投げ入れる鉄などの「掂水砣」という道具が不可欠なものとなる。

第5章では、遠洋漁業である海南島潭門の採貝漁を事例とした。遠洋漁業では、航海術が特に重要となる。そのため、本章は航海術を中心に調査資料を展開した。近年、海南島の「更路簿」という航海書についての研究が中国で盛んになっている。本章では、「更路簿」などの文献資料とフィールドワークに基づき、海南島の漁民の伝統的な航海術が豊かな知識と経験をもっていることを明らかにした。船長の経験と「勘」は、特に重要なものであった。

終章では、以上の6章の分析を踏まえて、漁撈に関わる「民俗知」の内容と特徴を明らかにした。漁撈をめぐる「民俗知」は、断片的な知識ではない。道具の作製、航海術、漁法、日常生活、信仰という一連の活動を含む総括的な知識である。その領域は、海だけではなく、陸の資源（材料）・山（標識）にも及ぶもので、漁民が生活している空間と自然総体に関わるものである。漁撈をめぐる「民俗知」の特徴は、自然環境への適応、漁撈の種類による認識の相違、近代科学的思考との違いという3点がある。

【論文審査の結果の要旨】

序章で述べた3点の研究視点は、明確であり、興味深い。第一に、民俗学研究の視点を通して、人間と海との付き合いから生まれた海洋文化を考察すると述べている。海洋文化の研究は、中国においても近年の研究視点であり、それを一般の人、つまり常民の立場から調査研究する点は、中国の海洋を対象とするが、民俗学的論文としては新たな研究視点を持っていると言える。第二に、中国海洋漁民の主要な活動である漁撈をめぐる、漁船、漁具、航海、漁法、信仰、禁忌など全体的・総合的な視点に立つと述べており、漁船や漁具などの物質文化だけでなく精神的な側面も対象とする点が興味深い研究視点である。第三に、自然環境・魚種による「民俗知」の相違を重視し、異なる地域の漁撈を比較するという比較の視点も有益である。

第1章では、漁撈と航海術に関する史料を分析した。その中で、第2章、第3章も含めて「民俗知」という用語を使用しているが、その意味がこの場所では不十分だと思われる。第2章では、「民俗知」を漁民や漁村の仕事や生活であると述べているが、それは人の知識や技能であり、「民俗」とも考えることができる。研究の主体を人として、その知恵を重要視するという意図であれば、それを強調して「民俗知」を説明することも可能であるかもしれない。しかし、「民俗知」を対象とすることが、本論文の主要な視点であることは特徴である。また、歴史的な「民俗知」として、

中国における航海術の文献資料を前漢から民国まで整理している。その中で、明代の『順風相送』を利用して、その中で書かれた航海術著した点は重要である。

第2章では、海南島における定置網漁を事例として、沿岸漁業に見る民俗知を検討した。とくに、定置網漁をしている漁民に、二つの灯台を見て海上の乗っている船の位置を理解する民俗技術について調査を行った。天体や気象からも自分の位置を確認する民俗技術があり、それを写真など自分の調査から検討している点は有効な調査である。同様に、定置網漁の網などの道具とその使用方法を漁民から調査している。とくに、月や日によって海水が動く「流水」は海で漁をする際に重要であり、毎月「流水」の始まる時間を文字で書いて漁民がもっている。「流水」については、歴史的文献や図を踏まえて分析している。さらに、漁民に関する信仰の調査も行っており。海南島の調査地は、福建からの移民が多く、媽祖信仰がこの地に伝播しており、豊漁と航海安全の漁業に関する信仰が媽祖信仰と結びついている点の調査は、信仰に関するこの地方の特殊性を示した調査と評価できる。

第3章では、山東省の青島における沿岸漁業の民俗知を検討した。調査地である会場地域の沿岸部で定置網が行われるが、海に一つの杭で固定する「掛子網」と6つのひもで海底に固定する「老牛網」について網の図を自分で描いて説明している点は良いが、その網による漁についてもう少し調査が欲しかった。ただ、その定置網と羅盤による航海術の調査は、従来民俗学ではあまり行われていない調査で貴重である。

第4章は、青島港東におけるサワラ流し網漁を事例とした、沖合漁業にみられる民俗知の研究である。サワラ流し漁は、流し網を使用して行う刺し網漁である。流し網は、漁具の位置をいかり・杭などで固定せず、潮流と風力によって流して使用する刺し網漁である。サワラ流し網漁の構造は、数十枚の網を接続して、その一端をロープで漁船と繋げる。漁場では、漁師は風向や潮流、そして干潮・満潮の時間を把握しなければならない。さらに重要なのが海の深さであり、「掂水砵」という道具が重要である。その道具は、明清の文献にあり、江戸時代の日本の文献にもある。日本では、海底の深さを測るための縄付きの重りで、「つるべ」と呼んだ。当時の日本の本には、オランダから伝わった航海術だけでなく、「つるべ」を見ると中国から伝わった航海術も記されていることが分かった。さらに、海底の重りの中国における「鉛錘」は、海洋考古学の資料としても発見されており、中国ではかなり使われており、この「鉛錘」の調査は、漁民に対する聞き書き調査でも行われており、本論文の深い調査とすることができる。

第5章は、海南島の採貝漁を事例とした遠洋漁業に見る民俗知をまとめた。海南島の航海書として、「更路簿」を調査した。「更路簿」は、海民が航路を記録した歴史的な資料で、海南省博物館と中国南海博物館にある。2008年に、手書きの「更路簿」と漁民で口頭伝承された更路簿が、中国国家文化遺産として登録された。著者は、漁民に対して実際に「更路簿」について聞き書き調査をしている。「更」は10海里であることや、「流水」は海水の早い場所で危険な海域であることやそこでの操船など操船の重要なことを調査し、これは文献としての「更路簿」の具体的な内容を聞き書き調査で明確化した点は評価できる。また、羅針盤について、実際にそれを用いた聞き書き調査も重要である。

本論文で、漁業に関わる点について漁撈をめぐる船と漁具および公開について幅広く調査をした。それを民俗知としてまとめ、民俗知は、人間の生産活動の過程である自然・社会との付き合いから生まれた経験であるとした。その経験は、知識だけではなく、技術、技能、信仰を含み、日常生活に大きな影響を与える。民俗知は地域の文化の根であると最終的にまとめた点は、漁業の新たな研究視点を示したと評価できる。

以上、本論文は神奈川大学歴史民俗資料学研究科における博士論文として大きな成果を上げ、高

度な水準に達していると評価できる。本論の審査結果に基づき、兪鳴奇氏に博士（歴史民俗資料学）の学位を授与することがふさわしいものと審査員一同これを認める。